

キリンホールディングスにおけるAIを活用した新たな研究スタイルの全貌とR&D変革の方向性

Gemini 3.6 Flash

概要と導入背景：研究現場における「思考の分断」の克服

キリンホールディングス株式会社と株式会社GenerativeXは、研究者の創造性を拡張することを目的に、AIエージェントを研究活動の流れに組み込んだ新たな研究スタイルを構築し、2026年よりキリンの一部の研究部門・研究所で運用を開始した¹。公式発表では「新たな研究スタイル」および「AIネイティブな研究環境」と表現されており、「AI研究員」は報道上または本稿上の便宜的な呼称である¹。本取り組みにおいてAIは、仮説形成、情報探索、壁打ち、文書化、知見共有を一体的に支援する伴走者として位置付けられている¹。なお、使用モデル、接続データ、検索方式、セキュリティ構成などの詳細な技術仕様は公表されていない¹。

近年の生成AI技術の進展に伴い、文献探索や仮説生成など、高度な思考を要する領域にもAI活用が広がっている²。しかしながら、従来の企業におけるAI導入の多くは、定型文書の作成や検索などの「部分的な業務効率化」ととどまるケースが多いのが現状であった²。

実際の研究開発(R&D)現場では、情報の探索、過去資料の検索、仮説の整理、およびメンバー間での共有業務など、本来注力すべき創造的活動とは異なる作業によって研究者の思考が何度も中断される「思考の分断」が大きな課題となっていた²。キリンホールディングスとGenerativeXは、この課題に対し、研究者がその都度AIを呼び出して使うのではなく、研究活動の流れの中にAIが常時存在する研究環境の構築を目指した¹。これにより、思考の連続性を維持しながら仮説探索や知見蓄積を行う環境の整備が進められている¹。

公開情報から確認できる機能的特徴

キリンホールディングスおよびGenerativeXの公表資料に基づき確認できる、本研究スタイルの主な機能的特徴は以下の通りである¹。

1. 研究フローにAIを組み込む設計：研究者が都度AIアプリやツールを立ち上げて呼び出すのではなく、研究活動の流れの中にAIが常時存在する環境を目指す¹。
2. 思考を止めないリアルタイム支援：仮説形成、情報探索、議論の相手(壁打ち)、ドキュメント化、および知見の共有までを一体的に支援する¹。
3. 研究者主役の設計思想：AIは研究者を代替するものではなく、研究者の創造性を引き出す「伴走者」として定義されている²。
4. 個人から共創知へ：仮説の構築、議論、情報探索の履歴などをシステムに蓄積し、組織全体で活用できるようにする²。

なお、研究者個人の専門性や研究テーマの深い学習、課題兆候の検知、自律的な仮説提案、研究者間における連携の促進支援などは、今後順次拡充が予定されている将来計画・機能として記載さ

れている²。

比較項目	従来型R&Dデータ 検索・ツール	汎用生成AIチャット (都度起動型)	今回構築された研究 支援スタイル
利用形態	受動的なデータベ ース検索	対話ウィンドウに都 度プロンプト入力	研究フロー内にAIを 組み込み常時存在 ¹
思考の連続性	検索・抽出のたびに 作業が分断	プロンプト構築とコピ ペで思考が中断	思考を止めない一体 型リアルタイム支援 ²
知見の共有	完成されたレポート・ 資料のみ保存	個人の対話履歴とし て非共有化	仮説・議論・探索履 歴を組織で蓄積・活 用 ²
AIの役割定義	単なるデータ検索シ ステム	タスク代行・定型文 作成ツール	研究者の創造性を 引き出す伴走者 ²

開発プロセスと体制構造

本システムの構築にあたっては、キリンが研究構想の設計および研究現場への適用を担い、GenerativeX(AIエージェントを活用したエンタープライズ向け業務変革支援を行うFDEコンサルティングファーム)がAI技術の提供およびシステム実装を担当した¹。

開発プロセスにおいては、実際に使用する研究員の意見を取り入れながらアジャイルに設計・開発が進行された²。研究者が実務で本当に使いたい機能と技術の可能性を突き合わせて開発された結果、開発に関与した研究員からも「自らの研究活動に適したツール」として好意的に受け止められている²。現在は一部の研究所での活用にとどまるが、将来的にはキリングroup内への拡大も視野に入れられている¹。

全社デジタル戦略「KIRIN Digital Vision 2035」と他施策の整理

本取り組みは、キリングroupが掲げる長期方針「KIRIN Digital Vision 2035」に基づいている²。同ビジョンでは「生産性向上(人がやらなくてよい仕事をゼロにする)」と「価値創造」を二本柱としており、食・ヘルスサイエンス・医の領域で価値創造の「質」「量」「スピード」を高めることを目指している³。

キリンにおける主要なAI施策・基盤とその対象範囲は、公表情報に基づき以下のように整理される³。

- **BuddyAI**: 独自の生成AIツール。2025年5月より国内従業員約1万5,000人への展開を開始³。導入当初、定型業務削減等により年間約31万時間の業務削減を計画見込みとして掲げた³。2025年10月時点での平均利用率は約70%と発表されている⁵。

- **ChatGPT Enterprise**: 全社一括導入ではなく、戦略立案・企画系、研究開発、マーケティングなどの一部部門を対象に導入されている³。
- **Microsoft 365 Copilot**: 2025年6月に麒麟ホールディングスへの全社導入を決定し、順次グループ内へ展開。導入開始約半年で6,000人超へ拡大している。
- **AI役員「CoreMate」**: 過去10年分の取締役会議事録等を学習した12のAIペルソナが、経営戦略会議等で多角的な視点を提供し議論を深める取り組み³。
- **AI Research Agent**(協和麒麟): 製薬領域の研究開発において、膨大な科学文献と社内データを統合検索し、研究仮説の創出を支援する調査特化型AIエージェント(内製実装)⁶。

適用領域	システム・施策	対象範囲・運用状況	戦略的狙い・実績/目標
全社共通業務	BuddyAI	国内従業員約1.5万人(利用率約70%) ³	定型業務削減(年間約31万時間の創出を見込む) ³
一部専門部門	ChatGPT Enterprise	企画・R&D・マーケティング等の一部部門 ³	高度なテキスト解析・企画立案支援 ³
経営意思決定	AI役員「CoreMate」	経営戦略会議・グループ事業会社 ³	12のAIペルソナによる多角的な議論推進 ⁴
創薬研究	AI Research Agent (協和麒麟)	協和麒麟研究本部 ⁶	科学文献と社内データの統合検索・仮説創出 ⁶
研究開発(R&D)	研究フロー組み込み型AI(本取り組み)	麒麟の一部研究部門・研究所 ¹	仮説形成から知見共有まで一体支援・創造性拡張 ¹

本取り組みは、この重層的なAI活用体系の中で、イノベーションの源泉となるR&D部門の知的生産性を高めるための施策として位置付けられている¹。

業界動向と本取り組みの特徴分析(筆者による考察)

※本セクションの記述は、公表された事実に基づき、本取り組みの位置付けや期待される特徴について筆者が分析・考察を加えたものである。

日本の消費財(CPG)・食品・ヘルスサイエンス業界においても、AIを活用した研究開発変革が進められている⁶。例えば、味の素株式会社では「AJI AI Chat」やMicrosoft Copilotを中心とするAI利用率が、3月末時点で同社単体の8割を超えている⁷。また、経済産業省・NEDOが主導する「GENIAC」プロジェクト等を通じて、製造業データのAI Ready化や技術伝承における暗黙知の言語化に取り組

んでいる⁷。

これらの動向と比較した際、公開情報から確認できる麒麟の取り組みの特徴として、以下の点が挙げられる。

1. 思考の中断を防ぐ組み込み型アプローチ: 都度プロンプトを入力して指示を出すコマンド実行型ツールに比べ、研究フローの中にAIを組み込み常時存在させることで、研究者の思考の波を阻害しないインターフェース設計を目指している点¹。
2. 多角的な事業領域の知見結合可能性: 食・ヘルスサイエンス・医薬品という多様な事業ポートフォリオを持つグループ内において、思考・探索の履歴を共有蓄積可能にすることで、異分野間の技術クロスオーバーを促進する環境となり得ること²。
3. 試行錯誤プロセスの構造化: 結論だけでなく、仮説の立て方や壁打ちの議論履歴といった思考の軌跡が蓄積されることで、熟練研究者のノウハウ(暗黙知)の組織的活用につながる期待があること²。

R&D向けAIエージェント一般において想定される潜在的风险 (筆者分析)

※以下は、麒麟において顕在化した問題を示すものではなく、公開情報をもとに、R&D向けAIエージェント一般について想定される潜在的风险を筆者が整理したものである。

1. ハルシネーション(幻覚)とファクトチェックの重要性

生成AIが出力する「確からしい誤解(ハルシネーション)」は、精密なエビデンスが求められるR&D領域において無視できないリスクとなる。提示された誤った文献データや化学的示唆を鵜呑みにした場合、無効な実験計画にリソースを浪費する可能性があるため、研究者によるファクトチェック(事実検証)の徹底が不可欠である。

2. 「思考の均質化」とセレンディピティ(偶然の発見)の維持

AIの出力は学習データ、モデル設計、プロンプト、検索データ等に依拠する。AIが常に提示する選択肢に頼りすぎた場合、研究者の試行錯誤や泥臭い直感が減退し、全員が類似したフレームワークでしか発想しなくなる「思考の均質化」を招く懸念がある。科学的突破口となる一見非論理的な着想や、実験の失敗から生まれる偶然の発見(セレンディピティ)をいかに阻害しないかが課題となる。

3. 発明者認定・権利帰属と研究過程の記録

日本の特許法上、発明者として認められるのは自然人(人間)に限られる。AIを活用すること自体で人間の発明者性が失われるわけではないが、将来的な特許出願時に「発明の特徴的部分の完成に誰が創作的に寄与したか」を明示できるよう、仮説形成、実験設計、技術的判断などの思考・貢献過程を適切に記録しておくことがガバナンス上重要となる。

4. 過去データの「質」と「AI Ready化」の課題

食品やヘルスサイエンス領域における官能評価(味、香り、食感など)や熟練者の微細な加減といった「暗黙知」は、データとして構造化するのが難しい⁷。参照される社内データや過去の報告書が整理・統一(AI Ready化)されていない場合、AIの提示する示唆の精度自体が制限される可能性がある。

5. 運用コストの管理とパートナーシップ・ガバナンス

研究活動の文脈をバックグラウンドで追跡・処理する常時稼働型の設計では、利用頻度、利用モデル、コンテキスト長、検索・ツール実行量などに応じて、呼び出し型の利用より運用コストが増加する可能性がある。また、外部パートナーとの適切な役割分担、技術・データ・知的財産の帰属、保守運用、および将来的な内製化可能性を考慮した管理体制が求められる。

総括と将来展望

キリンホールディングスとGenerativeXによる取り組みは、AIを「単なる作業代行ツール」から「研究プロセスに寄り添う伴走者」へと位置付け直し、研究者の創造性を引き出すことを目的とした挑戦である¹。

本取り組みをはじめとするR&DへのAI導入が真のイノベーション創出につながるか否かは、AIの提示する示唆を活用しつつも鵜呑みにしない研究員の「批判的思考力(クリティカル・シンキング)」と、人間ならではの「問いを立てる力」を組織として保持・評価できるかにかかっている⁷。テクノロジーによって情報収集や整理の負担が軽減される中で、研究者がより本質的な課題設定と価値創造に集中できる環境の構築が期待される⁷。

引用文献

1. キリンとGenerativeX、AIで研究開発の在り方を刷新 - AI Watch, <https://ai.watch.impress.co.jp/docs/news/2131265.html>
2. キリンとGenerativeX、AIで研究開発の在り方を刷新 研究者と共創する新モデルを導入, <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001593.000073077.html>
3. デジタルトランスフォーメーション | イノベーションの源泉 | KIRIN - キリンホールディングス株式会社, <https://www.kirinholdings.com/jp/innovation/dx/>
4. 【AIニュース】あのキリンが導入したAI役員とは！？ - YouTube, <https://www.youtube.com/watch?v=bCMx7EvEQzw>
5. 従業員の生成AI利用率は70%。DXの先にある「人間にしかできない仕事、AIと共創する未来」, https://www.kirin.co.jp/journal/others/stories/20260227_01/
6. 患者さん中心の価値創造を加速する「エンジン」としてのDX | Stories - 協和キリン, <https://www.kyowakirin.co.jp/stories/20260710/index.html>
7. 「AIは現場を置き換えない、知恵を拡張する力だ」味の素CDOが語る変革を自分ごと化する極意, <https://sat.stockmark.co.jp/top-interviews/ajinomoto/>
8. 従業員の生成AI利用率は70%。DXの先にある「人間にしかできない仕事、AIと共創する未来」, <https://note-kirinbrewery.kirin.co.jp/n/nb059f4f338d5>